

「モーレッツ社員」がいてもいい

現有戦力が今まで以上に力を出すしか日本経済が伸びる道はない。といって無軌道に働き続けられ、貴重な働き手にダメージを与える。時間の使い方を変えれば生産性は上がる。こなすべき仕事にどう取り組むか。働き手の判断ひとつだ。

働く力再興

改革に足りぬ視点 ④

ろ。子育て中の女性や東病気が転機になった。縛を嫌う技術者も、会社にいる時間は短いほうが力が出る。そう考えた。

6時間で同成果

楽天を辞めフリーで働く日下朋子さん(36)。

市場調査や広報支援など常時5つほどの仕事をこなす。ベンチャー経営者

60分の会議は5分に短縮。浮いた時間で社員と意見を交わし、企画を練る。定例会議はやめた。昼食も打ち合わせに使

とは一人三脚で事業開発を進める。さぞモーレッツな働き方と思いきや、1日「毎日がオーデイション。1回のメールや提出物に魂を込める」。収入は正社員時代と比べても満足

他人に任せる。3つ目はのいく水準という。2人の共通点は、時間の判断で使うところを自分の判断で使った。長時間働きづめは

全員が「二刀流」

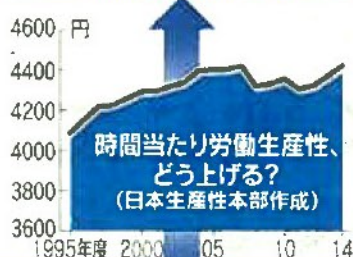
金属加工のオーザック(広島県福山市)は社員に1日8時間以上働かせない。仕事量も減らさな

時間の管理私に任せて



日下さんは貸しオフィスも活用し仕事を進める。

場所を選ばず働く



1人で2人分働く



オーザックは多能工化で生産性を向上

い。社員は工夫した。1時間給制度はいまの労働人が複数の機械を扱う「多能工」という仕組みを取り入れた。今は機械間を決めれば、むしろ部門の7割にあたる11人が多能工。残業は6年で3分の1に減った。

社内に休みやすい空気とをやり、職場を離れて生まれ、仕事と家庭の両立が進んだ。必要な仕事を短時間で終え、早帰りする人もいる。岡崎瑞穂専務(62)は「労働時間が減らして生産性を落とすわけにはいかない。必要がある。過労死や社員が何をすべきか考えてくれた」と話す。

精神的ストレスの発症は防ぐ。時間管理の規制を緩めつつ、無理を強いるも労働者は賢く働く。職場の監視は強める。その果に応じて賃金を払う脱こは行政の出番だ。